



さ、氣の毒さ。

折柄、急に、バサリ！底の方から、大きな鯉がそれを狙つて浮き出るや、一口に其の麩を呑み込んでしまつて渦巻を残して沈んで行つたりします面憎さ。

その後では、小さな鯉が、おきろきはしたものの、まだ麩の匂を探して水面を泳ぎ廻る可愛らしさ。

小さな鯉

梁田貞氏作曲

小さな鯉に麩をやれば

大よろこびで寄つて来て

皆で バクバク

つゝきます

つゝいて見ても食べられぬ

麩は大きくて食べられぬ

皆で泡を

ふくばかり

(「大正幼年唱歌」第二集)

この各節の結句

「皆で バク バク

つゝきます」

「皆で 泡を

ふくばかり」

は説明に過ぎますので、

「皆で、つゝく

バク バク バク」

「皆の泡が

ブク ブク ブク」

「こもしてみました。此の様に、擬聲擬態で終る事は、幼児向のものには、最も効果的であります。「つゝきます」こか「ふくばかり」こかの説明文にしない方が、輕快味も豊かです。

○

「こほろぎ」蟻の寓話も今更ではありませんが、夏の努力家、精勤者は、蟻であります。蟻は、朝から晩まで、せつせこかせいで倦む事を知りません。お庭に出てみますと、人目につかないながらも、きつと、蟻がをります。しかも、蟻の居るや、必らず、動いてをります。その動くや、必らず、急いでをります。決して、のろ／＼してゐません。大きい蟻でも、小さな蟻でも、必らず、忙しげに走つてをります。謂はゞ、蟻は、終に、駆廻つてをります。何といふ努力でせう、何とした精勤でせう。

そして、もし、餌を見つけるや、忽ちにして、列を造つて、ゾロ／＼行列がはじまります。その餌物へ向つての行進がはじまります。さて、その獲物を運ぶこなるこ、何といふ協心協力でせう。全身の力を傾注して、押す、引張る、前へ廻り、後へ戻り、めい／＼の力の有りつたけを出し合つて、えんやら、うん、うん、ほん／＼に涙ぐましい活動です。

蟻の活動を見てゐますこ、つひ、忙しさも忘れて、いつまでも飽く事を知らぬ現在の私でもあります。——大きな坊ちやんをお笑ひ下さい、——しかし、蟻の曲は、類が少ないでせう。しかも、之は、作曲者が、まづ音によつて蟻の活動を表現されたのへ、歌詞を、あてはめたものです。「分捕物」といふのは、少し困るかゝ案じてゐますが、桃太郎でなくても、コドモの世界の獲物は、かういふかゝ、作曲者ゝ協議の上で、つかひました。もし、いけませんでしたら

「大きな獲物」

こも致しませうか。また、後の、

「何處まで曳くか」

こは問ふまでもない、自分達の巢まで運ぶのですが、その巢は、何處に有るか分らないから、やはり「こゝまで曳くか」です。

蟻

梁田貞氏作曲

チヨロくくく　　チヨロくくく

大蟻　小蟻

チヨロくくく　　チヨロくくく

ゾロ　ゾロ　ゾロリ

毎朝早く

毎晩おそく

チヨロくくく　　チヨロくくく

ゾロ　ゾロ　ゾロリ

えんやらや　えんやらや

前からひけば

えんやらや　えんやらや

後から　押すよ

力を合せ

分捕物を

えんやらや　えんやらや

何處まで　曳くか

○　（「大正幼年唱歌」第十集）

私は、夏毎に、東京の空地で、また人通の少ない街路で、慨いて佇むことが屢々です。何故、東京の男兒は、あんなに、さんぽを追つかけまはすのでせう。現に、昨朝も、寓居を出て、舊藩主邸の外塀に沿うて坂を下つて行きますと、毎朝幾人もの登校姿のコドモに會ふあたりで、一男兒、ランドセルを背負つたまふ、長いもち竿を持つて、急に、坂を上らないで、駆け下り出したのを見ました。その眼は、その竿は、地上高からず、一匹の蜻蛉の飛ぶのを追ひかけるのでした。

「さうぞ、うまく逃げますやうに！」

私は、急ぎ足に下つて行きました。その一男兒を追つかける様に。

さんぽは、身輕に、あわてもせず、急に高くも舞ひ上らず、波打つて追つて來る竿の先に擦々に、それでも、辛うじて

逃げて行くのでした。一度はその翅に、竿の先は觸れたのですが、大丈夫、生垣の上へ逃げてしまつて、廣い邸内へ舞ひ込みますよ、男兒は、

「もちが利かなくなつたな」

と獨言をいつてゐるのでした。ほんきに、東京の男兒は、何故、あんなに、蜻蛉を、親の仇の様に、追つかけまはすのでせう。狩獵ばかりして食物を得てゐた祖先の子孫だからきて、もう、そんな潜在したものは、忘れても宜いではありませんか、路上でも兒童の遊びには、干渉したくない私ですが、何度

「さんぽをさるのは、お止しなさい」

さいつたか分りません。又、「親子のさんぽ」さういふ一篇をも、にして、コドモの籠に捕へられた子供さんぽが、親を慕うて泣き、歸つて來ぬ子供を待ちかねた親さんぽが、戸手の藪かげで、泣いてゐるこゝを歌つて、人間のコドモに、親子の情を感じさせ、また、さんぽは捕らぬ事にさせやうと願つたこゝもあります。私のコドモ本位のニコピン主義には反してゐますが、此の如きは、センチメンタルな、さういはず同情愛憐さこそ、悦びたくて――。

さて、これは、さうした蜻蛉についての悩みでなくて、唯、輕快に大空を切つて元氣よく、眞一文字に飛ぶ蜻蛉です。さうした蜻蛉を呼ぶ心持です。これも、曲が先に出來たのに、歌詞をあてました。するさ、「さんぽ」のアクセントが、反對になりました、即ち「さ」よりも「ぽ」が下つてしまふ事になりました。曲全體は非常な名曲ですが、名詞としての「さんぽ」が、歌はれる時、「さんぽ」に聞えないので、先年、私自らも作曲してみまして、平調子の箏曲にしてみましたところ、意外によい曲ださうでして、私の近親の家庭では

トーン テ チン

チン、テ、ツ、チン

ミ、箏で、ひいて悦んでゐます。しかしそれは

さんぽ

さんぽ

こんで来い

ミ歌ふのです。ミすつばぬいては、いけなかつたのですが、さうぞ、蜻蛉は、歌にもし、繪にもし、願はくば、ピアノでも、琴でも三味線でも歌つて幼児の時から、これを可愛がらせて下さい。

さんぽ

梁田貞氏作曲

さんぽ さんぽ

来い 来い

兩羽根

ひろげて

涼しい風に

スーイ スイ

こんで来い

（「大正幼年唱歌」第六集）

○

さゝ舟、笹の舟。笹の葉の舟。これは、のびやかな夏の遊びです。しかし、笹舟は、中々、眞直には流れて呉れません。それも、舟の作り方が下手な時は、重心が正しくなくて、中心を失ひ勝で、流れ出したと思ふと、すぐ、沈没するのさへ有つて賑かな笑ひ聲を誘うて、愉快です。

「や、や。あぶない。あ、沈没！」

「あ、あぶない。あぶないく」。

「なーに、大丈夫。それ、しつかり。それぞれ、しつかり」。

ビッコをひいて流れるのは、却つて速くて愉快です。ふら／＼しながらも、危なつかしく速いのであります。

實は、私共人生の行路にも之があります。私共は、笹舟を流してみても、まさに、人生を思ひ合はさせられます。沈むと思へても、何ミか、その難關を切抜けるミ、急に速力を出して進む——それは、人の一生の中にも有るこころです。

私は、此の一篇を覺えた幼児が、成人してのちも思出して此の歌詞の心に觸れて、たゞへば失意の時には力を湧かせ、順風に帆をあげてゐる時にも、油斷せず、人生の行路に、不斷の努力をつゞけ、希望を失はないで、目ざす前途に前進するこゝに、正に、此の笹舟の如かれミ、祈つてをります。

しかし、幼児に、そんな理窟をいつてきかせたり、こんな説明をしてはならぬ事は、申すまでもありません。さて、歌詞として、第一節の「流れて、浮いて」は

「流ながれに 浮ういて」

では如何でせう。「流れて、浮いて」は、事實から申しますと、

「浮いて 流れて」



が正しいのです。しかし、これは「四、三」の起りにつゞく自然のリズムですから、やはり「四、三」でなくてはなりません。もし、「三、四」につゞくのならば、「三、四」でも宜しいですけれども。

又、第三節の

「不出來な舟 速い」

は「六、三」です。これは、「不出來な」を倍の速さで、二拍に歌つてしまふのですが、それが却つて、「ビッキリ、コッキリ」に調和します。

次に、「ビッキリ、コッキリ」は、ビッコをひく様なビッキリなのですが、ビッキリといひますと、一般に、驚く事です。即ち、驚いた様に、

ビッキリ コッキリ

しながら、の意にもなりますが、もし、

ビッキリ コッキリ

としては如何でせう。しかし、説は有りませうけれど、驚いたやうに、

ビッキリ コッキリ

しながら流れて行くのですから、やはり、さうしておきたいのです。又、

「沈むこ見えて」

は、實は、

「沈むこ見えても」

なのです。

「沈むこ見えながらも」

なのです。此の反語の意味の「て」は、幼児にも分るこ信じます。英語の “app” が、決して、いつも「そして」でなく「や」や「し」でないのこ同じです。

さゝ舟

宮城道雄氏作曲

笹舟 小舟

流れて浮いて

ビククリ コククリ

ゆくよ

不出來な お船

沈むこ見えて

ビククリ コククリ

ゆくよ

この船 速い

不出來な船速い

ビククリ コククリ

速い

(箏曲童謡第五集)

夏の自然は、實に、人間の爲にも、たへず、愉快な贈物をして呉れます。初秋の蟲もさる事ながら、「蟬の大聲」は何うです。喧しいさはいはないで、よく、耳傾けて下さい、あの小さな體で、あの大聲の出る事は、如何に、萬物の靈長さ、まも、顔色なしではありませんか。何でも、人間なら、東京の丸の内ビルディングを、高飛で、一跳に、飛び越えなくては、風に敗けになるのだと聞きました。それと同じに、蟬の聲の大きい事から考へますと、人間は、此の體を以てしては、もつと／＼大きな聲も出なくてはならないのです。しかし、何も聲の大きいばかりが、えらいのではありませんから、安心して、唯、きいてをれば宜しいのですが、全く、大きな聲が出るものですね。

せ　み　　梁田貞氏作曲

お倉の向で　　ないてゐる

ミン／＼蟬が　　ないてゐる

大きな聲で　　ミーン　ミン

小さな體で　　あんなこゑ

ミン／＼蟬が　　ないてゐる

ミン／＼蟬が　　ないてゐる

向の森でも　　ないてゐる

カナ／＼蟬が　　ないてゐる

大きな聲で カナ／＼ カナ／＼

小さな體で あんなこゑ

カナ／＼ 蟬が ないてゐる

カナ／＼ 蟬が ないてゐる

(「大正幼年唱歌」第二集)

一體蟬があんな大聲で、夕方になつても、まだ啼くのは、一生懸命啼きつゞけるのは、何うしてやせう。

さう考へてみますと、何か、人間に、知らせるのではないでせうか。

もし、人間に知らせるゝすれば、何んな事を知らせるのでせう。

人間は、蟬の聲をきけば、

「夏が來ました」

こいひます。ですから、「夏だ／＼」と知らせるのでせう。

ミンミン 蟬が ないてゐる

梁田貞氏作曲

ミンミン 蟬が ないてゐる

向の森で ないてゐる

大きな聲で ないてゐる

一生懸命 ミーンミン

ミンミン 蟬が ないてゐる

夕日をあびた森の木で

涼しい聲で よい聲で

夏だ夏だミーンミン

○

太陽の方に向つて咲くさいふ花、日まはりの花、大きな花、よく見るミ、實に複雑な花ですが、ぎつしりミ厚ぼつたい花ですが、極めて、無雜作に、唯、「日の方へ」さいふ心持が、嬉しいではありませんか。その單純さ、その平明さ。私は、如何にも、幼兒向の花ミ見て、悦んでゐます。朝顔が、ラッパの形の花である事が嬉しいミ同じく。そして、朝顔ミは、眞反對に、暑さを悦ぶ元氣よさは、さうです。

歌詞の、「キラ／＼／＼／＼ミキラ／＼／＼」ミの區別も、御注意下さい。朝の光ミ、眞晝の光です。また、「ニコ／＼ニコ」ミ對照の「ナヨ／＼／＼」は、弱すぎますが、軽く歌はせたいミころです。さうして、

「元氣な花の 向日葵よ」

は、

「元氣な花よ、

向日葵よ」

ミした方がよかつたかミも考へられます。

向日葵

梁田貞氏曲

キラ／＼／＼／＼ 日がてり出せば

ニコ／＼／＼ 向日葵が

大きな花を

よろこぶやうに

東の方へ 向けてゐる

ギラ／＼／＼／＼ 日が照りつけば

ナヨ／＼／＼／＼ 草も木も

しをれるほごの

暑さの日でも

元氣な花の 向日葵よ

(「大正幼年唱歌」第六集)

○

夏の涼味は、曉風、曉露、そして、實に、夕立から湧出ます。夕立は、まづ、電光と雷鳴とに前觸れさせ、時に疾風一過、すぐ、バラバラと大粒に降つて來ます。人間と共に不意を打たれる動物の中で、遠出をしてをつた鶏と、今朝早く繕つて、立派に完成した巢の中央に陣取つてゐた蜘蛛とで、夕立をあらはしました。鶏が、垣根をくぐるのは、取り立てゝいふ程の事でもありませんが、木戸の方へ廻らないで、體をすくめても、すれ／＼にも、無理にも、近道をして戻つて來るのです。しかも、「コ、ケ、コ、コ、コケツコ」啼きながら、スタカットの心持で、ミツミツと戻つて來るのです。又、蜘蛛も、「こりや大變だ、濡れては大變だ」さばかり、あわてふためいて、逃げて行くのです。此の二つの動物の「ミ」んで來る「様」、「にげて行く」様によつて、夕立は、いよ／＼面白いものになります。

夕 立

小松耕輔氏作曲

ピカ／＼光る いなびかり 電

ゴロ／＼なり出す雷に

おごろき あわてゝ 垣根をくぐり

鶏 にげて さんで来る

コケココ

コッコミ さんで来る

ザワ／＼木の葉がゆれ出して

バラ／＼降り出す大雨に

八つ脚ひろげて るばつてをつた

大きな蜘蛛が にげて行く

スタコラ

サッサミ にげて行く

○ (『大正幼年唱歌』第六集)

夏は、地上の物みな暑い中に、海ミ、山ミだけは、涼しさうではありませんか。

しかし、目の前の海や、近い山は、まだ、現實すぎて、やはり、夏のものしか見えません。遠くの遠くの、廣い海こそは、暑さから絶縁されてゐさうではありませんか。同じく、遠くの／＼高い山こそは――。

此うした涼しさを表現したくて、すつきりした形を、並べました。ごたく／＼しないで、風通しのよい様に、海ミ、山

さ、両者は、相離れてゐても、平行させて、よく、風の吹き抜ける様にしました。

海の風山の風

宮城道雄氏作曲

一、夏です

海です 廣いです

朝でも 晝でも 日暮でも

涼しい風の わくところ

さほくの さほくの廣い海

二、夏です

山です 高いです

朝でも 晝でも 日暮でも

涼しい風の 湧くところ

遠くの 遠くの 高い山

(箏曲童謡第五集)

(次號「秋の幼年童謡」)